

老舎『微神』の冒頭の一段

一言語表現より作者の真意を探る一

秦 耕 司

○ 『微神』は作者老舎お気に入りの作品²⁾とあって、短編ながら作者が渾身のエネルギーを注いで書き上げた珠玉の一編である。

老舎が文章表現に一方ならぬ意を用いる作家であることはつとに知られているが、一字一句、句読点に至るまで細心の注意を払って、中国語の特性を遺憾なく活用しているのは、この『微神』に勝るものはないであろう。『微神』を読んでいると作者老舎の意志と意図が一字一句、標点符号に至るまでひしひしと伝わってくる。そこには単にコトバによる表現だけでなく、標点符号の用い方ひとつで、コトバでは表現できないコトバ以上の重要な作者の真意が宿されている。ここには標点符号は単に文章表現の補助手段ではなく、コトバによる表現と同等の、否、コトバによる表現を一段と高める作用があることが実例を以って示されている。

小稿は、コトバによる表現と標点符号の用い方による表現の活性化にメスを入れつつ、中国語の伝統的表現である対偶表現を新たな運用法で十二分に活用し、言外に作者の真意を暗示する表現に成功した老舎の筆力に迫ろうとするものである。小稿はその老舎の筆法を実感できるよう、所謂一般的な論文形式ではなく、読者とともに、作品を読み進むにつれて、その表現に込められた作者の真意を読み解く形で筆を進めることにする。

なお、『微神』については、伊藤敬一氏による解説と解釈³⁾があるが、小稿のように一字一句について解釈したものではない。また、相原茂氏によって教科書として出版されたもの⁴⁾があるが、小稿で取り上げている第1章の部分は「あまりに難解で幻想的」であるため、新たに教材用として

「“簡写”を試み、導入部を短くしてある」ので、これを参考にすることはできない。翻訳には竹中伸氏の⁵⁾がある。『微神』に関して、この外に注釈や翻訳がないのは、ひとえに『微神』が難解であるからであろう。『微神』に対して注釈を施す価値は十分あると言ってよい。

- 1 清明已过了，大概是；海棠花不是都快开齐了吗？今年的节气自然是晚了一些，蝴蝶们还很弱；蜂儿可是一出世就那么挺拔，好像世界确是甜蜜可喜的。

清明節は、旧暦三月の墓参をする日。「孝」の原理が大きな比重を占める中国人社会にあつては重要な節気で、その日が何日であるかは自明のことである。ところが“清明已过了”〈清明節は過ぎた〉と、暦の上ではこの清明節が過ぎたことをはっきりと述べながら、その後で“大概是”〈たぶん〉と断定を回避している。このように、明白な事実を事実としていったん述べたことを、後から思い直して付け足したかのように推量表現に切り換える言い方は、何かそこに作者の屈折した心理が隠されていると感じられなくもない。ひょっとしたら作者は、清明節が過ぎたことを認めたくないのだろうか。もしかして家族の誰か——と言っても、作者のいちばん頼りにしていた人、もしくは最も愛していた大切な人を失って、その人の死を信じたくないのかも知れない。“过去了”〈過ぎ去った〉では過ぎ去ってしまった意味合いが強くなる。“过了”〈過ぎた〉だと、清明節は振り返るとまだすぐそこにあつて、手を伸ばせば届くところにあるような感じがする。亡くなった人を身近に感じようとする表現である。ここは普通の推量表現である“清明大概已过了”〈清明節はたぶん過ぎただろう〉では文字通りの推測になってしまつて、その辺りのニュアンス、作者の屈折した心理が全く消えてしまう。

清明節のころに花を咲かせる海棠は、お墓参りをして霊を弔う人につながる思い出があるのだろうか、「すっかり～した」と言う“都～了”と、

「もうすぐ～だ」と言う“快～了”を併用し、文全体を“不是～吗”で囲んで反語表現にしている。ここにも現実を直視することへの恐れからくる、作者の重苦しい心情を察知することができよう。“不是～吗”〈～ではないか〉は、多くの場合、眼前の対象を指して、自分が断定するのを避け、相手に確認さす語気を表すが、ここは作者がまだ海棠の花を見ていないので、推断になっている。しかも推断の対象である海棠の花の咲き具合を、単に満開になっている時点を表す“盛开”〈満開〉ではなく、日を追って毎日少しずつ咲きながらついには咲きそろったという時間的経過に焦点を当てた“开齐”〈咲きそろろう〉とするのは、単なる想像や推測ではない。作者にとって亡くなった人との大切な思い出につながる海棠の花を、すでに満開になっているところであることを承知しながら、今日までまだその思い出の場所に行っていないのである。海棠の花を直接眼にすれば、その人の死を改めて実感せざるを得なくなり、その人にはもう会えないのだという寂寥感が湧いてくる。それを恐れて思い出の場所に行くのを避けているのであろう。前句の“清明已过了，大概是”とは句点の「。」で区切らずに、文の並列を表す「；」で結んで、同じ一つの平面で並ばせているのも、そのことを匂わせている。“大概是”の後が「，」であれば“海棠花不是都快开齐了吗”は、海棠の花を眼にしなからする自問自答形式の確認となり、“清明已过了，大概是”の根拠となる。「；」は文並列であるから、同類もしくは対照的な内容を持つ文が、並置もしくは対置されていることになる。“不是～吗”を推断とする理由である。

とは言え「A；B」は、BがAの理由、原因を述べる用法もあるので、作者が海棠の花を眼にしなから清明節が過ぎたことを推測している解釈も成り立つ。実際ネイティブスピーカーは、この文を見た時に、例外なくそう受け止める。しかしそうすると、海棠の花は亡くなった人との関連がなくなり、単に清明節が過ぎたことを推測する根拠となる役割を担うだけの存在となってしまう。それではここで海棠の花を用いる必然性はなくなるであろう。清明節が過ぎたことを推測する根拠は、何も海棠の花に限らな

くてもよいからである。ここだけを見れば、もちろん文学作品としてはそれで十分である。しかし、それでは海棠の花は段落の中ですんなりと収まるであろうか。ここはやはり段落全体の位置付けとして見なくてはならない。反語文“不是～吗”が確認であるか、それとも推断であるかは、後続の文との関係で自ずと明らかになるであろう。

春分や夏至など二十四節気は、旧暦においては、毎年規則的に遅くなる。だから清明節が遅く来ること自体は取り立てて話題にすることでもない。春の到来とか、初雪といった、その年々の気象によって早まったり遅れたりする自然現象ならともかく、暦の上で特定の日として決まっている節気を、しかも遅く来ることがはつきり解っている清明節を、わざわざ遅いと言及するのはなぜだろうか。しかも単なる暦の上のこととしてのみ表現するとすれば、“今年节气晚了些”〈今年は節気は少し遅い〉とするのがいちばん自然な文であろう。“晚了”の前に強調を表す“是”を用いることによって、作者が“晚了”について何かを意識しているような感がするし、“今年的”〈今年の〉と、限定語の対比を明確にする“的”を用いているのも、意識的に“今年”に焦点を当てていると見ることもできよう。“自然”〈もちろん〉は前の文を受け、それを原因として、当然の結果を述べる用法である。前の文は二つしかない。その二文ともにあえて推量表現とした文である。従って、文面には明白な形でこそ現れていないが、“自然”が清明節や海棠の花に対する作者のある心情を受けているのは間違いないだろう。とすれば、この一文においてひっかかりを感じる点は、すべて作者にとって大切な人の死を認めたくないという心情の現れであると見て、まず間違いはないと思われる。

この外、“节气”〈節気〉にしる“些”〈少し〉にしる、使われ方がいかにも自然で、つい見逃してしまうところであるが、これらを特定の“节气”である“清明节”や、実際のズレを表す具体的な日数等と比較した場合、これらの語が、作者の沈んだ気持ちを、自然現象を装って、やわらかいベールで包む働きをしていることが窺えると同時に、逆に見れば、その

ようなベールがあるからこそ、作者の屈折した気持ちが、そのベールを通して、微かにのぞいているのを垣間見ることのできるのである。

その遅い清明節の到来に、弱々しいチョウを結びつけているのは、亡くなった人をチョウに重ね合わせているのであろうか。とすると、作者が失った大切な人は、若い女性ということになる。チョウに、人間を表す名詞にしか付かない“們”〈たち〉を付けているのも、親しみや親愛の情を感じている表われであるかも知れない。しかし“還”〈まだ〉は何を意味するのであろうか。今年“节气”の到来が遅くて暖かくなならないから、チョウはまだ力がないと言うのでは、確かに自然現象としては理解できるとしても、それではチョウは、これから暖かくなるにつれて元気がよくなるので、彼女の死とは全く逆の方向になって、事実とは矛盾することになる。従って作者の心情とは合わなくなって、作者の言いたいことが浮かんでこないのである。“還”は何を意味しているのだろうか。

春は、万物が芽を出し、新しい生命が生まれる季節。ハチは弱々しいチョウとは対照的に、この世に生まれ出たことを謳歌するかのようになり、元気よく飛び回っている。“可是蜂儿”〈しかしハチは〉とはせずに、“蜂儿可是”〈ハチはしかし〉とすることによって、両者の対比を一層明確にし、その違いを強調している。そして前句と後句を「，」で結ばずに「；」で区切ることによって、その対照的な違いに、より鮮明な印象を与え、生き生きとして生の喜びに満ちたハチの世界は、チョウには無縁であることを物語らせていよう。“那么”〈あのよう〉は、自分が実際に眼にしている光景を具体的に実感をもって表現しているので、ハチの描写には、視覚による客観性を持たせているし、“好像”〈まるで～のようだ〉とともにハチには少し距離をもった観察であって、自分はハチの世界には入り込んではいない。それはことわるまでもない自明のことである。ところが、ハチにことさら“一出世”〈この世に生まれ出るや〉と述べているのは、チョウとの対比であるところから、これはチョウの生命の衰弱、消滅を暗示させていると受け止めることもできよう。とすれば、先に見た問題として

残っている“还”は、「清明節が来ない限りは、弱々しくもまだ生きている」——望むべくもないはかない期待、ととるべきであろう。そう考えれば、“今年的节气自然是晚了一些”には、やはり作者の心情、つまり、彼女の死を実感せざるを得なくなる清明節の到来を、なるべく遅くあつてほしいと願う作者の気持ちが隠されていたことが、はっきりと見えてくるのである。作者は遅い訪れの“节气”と同じ線上にいるチョウの世界にいる。「;」は単に、弱々しいチョウと、元気いっぱいのはちとの対比だけではない。作者のせつないまでの願望的幻想の世界と、眼前に厳として横たわっている冷酷な現実世界との対比でもある。

中国語は文脈依存型の言語である。二つの文を「A ; B」で対比することによって、文Aと文Bを照射させ、お互いに隠されている意味を引き出し合うのもまた中国語の特徴と言えよう。音節構造が子音連続のない整然とした声母+韻母からなり、一音節一形態素で形態変化がないという言語的特徴を持つ中国語は、一形態素一文字という形態素文字——漢字を生み出し⁶⁾、聴覚面、視覚面双方の特徴を合体した対句法を発達させてきた。字数の不揃いや文構造の違いはあるが、このような二つの文の並置、対置は、現代語の散文においても違和感はなく、十分に通用する、と言うよりむしろ、中国語の言語的特徴を生かして、文と文を呼応もしくは照応させることにより、文の背後に隠された意味を引き出すという、いっそう豊かな表現力を獲得した、対偶表現の一つの発展形式と見なすことができよう。

最初の四つの文を、それぞれ二文ずつ「;」で対置し、初めの二文を、死を認めることから逃避するためにとった推測表現という同類の文で並べ、次の二文を生命力の衰と盛という対照的内容を表す文で対比させ、さらにはこの対置された二組の文を並置することによって、作者の隠された心理を浮き彫りにする手法は、作家老舎の並々ならぬ筆力を物語ってあまりあろう。大地をしっかりと叩き付けるような底知れぬエネルギーと、こ

の作品に対する作者の強い思い入れを感じさせずにはおかないのである。そこには、のどかな春の情景描写の内に秘められた、作者の深い悲しみに沈んだ気持ちと、愛する人への限りない思いが、しっかりと根を張っているのを感知できよう。鮮烈な出だしである。

話をもとにもどそう。チョウに重ねる人は若い女性である。とすると、失った大切な人は作者の新妻であろうか。いや、家族の一員であるとすれば、日々その現実の中に過ごしているわけだから、家族の行事である墓参をする日や、最も思い出深い海棠の花など、推量表現にするのは不自然である。とすれば、作者にとって大切なその人——その若い女性はぐっと焦点が絞られてこよう。“甜蜜可喜”〈甘い喜び〉を得られなかったところからすると、結ばれる前に失った恋人かも知れない。そう、そのように受け取ると、この後にも出てくる、いくつかの自然現象の描写でありながら、なんとなく奇異な感じのする表現もスッキリとして、違和感なく受け入れることができるようになるのである。

ここでその対象を明らかにしておこう。相手は作者の初恋の女性なのである。

無言のうちに愛し合っていた二人。しかし結婚は親が決めるもの。時代がそれを許さない。外国へ行く作者。家の没落で私娼に身を落とす恋人。そして二人の再会……。彼女を救い出そうとする作者。何も言わずに死んで行った彼女。初めて会ってから別れるまで、これといった話もしたことの無い二人。それでも心の通った二人。いや、ことばを交わさなかったとはいえ、ほんの半日間だけ、二人だけの時があった。二人とも純真な十七歳の時であった。恋人の死後、そのわずかな思い出を基に彼女と語り合う心象風景が、この小説の主要部分を覆っている。限りなく深い悲しみと、無限のやさしい思いやりが、洗練された詩の輝きをもった一文一文に支えられて、読むほどに、汲めども尽きせぬ味わいが、身体のスミズミにまでしみ込んでくる、あま

くもせつない、はかなくも永遠の、初恋の物語。悲惨な末路を歩んだがゆえに、成就しなかったがゆえに、作者がやさしく恋人に語りかける、悲しいまでに美しい、幻想的な一編の愛の詩編である。

2 天上只有三四块不大也不笨重的白云，燕儿们给白云上钉小黑丁字玩呢。

視線は空へと移って行く。うららかな春の日に青空に浮かぶ白い雲。その白雲を、およそ白雲を形容するには似つかわしくない“笨重”〈大きくてぼつりと重い〉というマイナスのイメージを表す語を用いて形容し、それを否定するという手法を採っている。また“不大”〈大きくない〉は何の変哲もないごくふつうの言い方であるが、奥母音で否認の気持ちを表す否定詞“不”が“笨重”と結びつく形で並ぶと、そこにはやはりある種の雰囲気や醸し出される。だから作者はむしろ、自分の沈んだ気持ち、晴れそうにない心を表そうとして、わざわざこのような語彙を選び、それを否定する形を採ったのではないかと思われるのである。とすれば、ここにも作者の心のカゲリを窺うことができよう。

ツバメに“釘”を付けているのは、チョウ同様に、可愛らしさの反映であろうか。後段では恋人をツバメに喩えた描写がある。しかし白雲の中で遊ぶ黒いツバメに、作者は何を託しているのであろうか。前置詞に場所を表す“在”〈～で〉ではなく、対象を表す“给”〈～に〉を用いているのも、黒いツバメが白雲に何かを働きかけているようであるし、動詞も遠くから眺めている“画”〈えがく〉などに比べると、“釘”〈クギを打つ〉は、ツバメの動きが何か身体に響いてくる感じのする動詞である。目的語は“黒丁字”〈黒いTの字〉。楽しく遊ぶというより、何かを訴えるように意識的に振る舞っている感じが強い。色は白と黒。そう言えば、空は死者が昇天する⁷⁾ ところであった。

3 没有什么风，可是柳枝似乎故意的转摆，像逗弄着四外的绿意。田中的晴绿轻轻的上了小山，因为娇弱怕累得慌，似乎是，越高绿色越浅了些；山顶上还是些黄多于绿的纹缕呢。

相当に主観的な文である。“没有什么风”は、「風らしい風はない」の意。感じるか感じない程度の、微かな風である。“没有风”とすれば、風は全くないことになる。柳の枝は古来、別れる時に、見送る人が旅立つ人に送るもの。“柳liú”は“留liú”〈とどめる〉に通じ、去り行く人を留めておきたい気持ちを柳の枝に託すのである。恋人の永遠の旅立ちを象徴しているのであろうか、この柳の枝が、弱い風とは不釣り合いなほどに揺れている。本当はそれほど揺れてはいないのであるが、死別した恋人を呼び戻そうとする必死の叫びであろうか、“故意的转摆”〈わざと揺り動かす〉として、風で揺れる以上の人工的な不自然な揺れとして表現した。それは作者の気持の乱れかも知れない。そしてここでは主観性の強い“似乎”〈～のようである〉を用いて、そのように感じるのは、あくまで作者の心理からであることを示している。ところが、別れを象徴する柳の枝が周囲の緑を“逗弄”〈もてあそぶ〉しているように映るのは、ある程度の客観性をもたせて、動詞“像”〈～のようである〉を用いている。そこにまた作者の屈折した心情が表れている。春の新しい生命を象徴する一面の緑。恋人の思い出を蘇らせる緑。それをかき乱すかのように揺れる柳の枝。

畑は明るい新緑である。緑は恋人の履いていたスリッパの色。光よりも、音よりも、色こそ永遠であり記憶に残ると言う作者。さまざまな色彩が出てくるこの短編にあつて、緑の出現率は26回と群を抜いている⁸⁾。そのうち“小绿拖鞋”〈小さな緑のスリッパ〉は7回。しかも恋人が私娼に身を落としているところを描いた箇所を除いて、作品全体にまんべんなく出てくる。恋人の思い出にスリッパの緑が基盤としてあるのは間違いないだろう。その緑が、小高い丘の上に登って行くにつれて薄くなっている。作者はそれを“娇弱”〈女性的な弱々しさ〉なので“怕累得慌”〈相当に疲れ

ているのではないかと受け止めている。その受け止め方も“似乎”である。しかもちょっと立ち止まって考えるように後置挿入の形を採っている。そしてこのように原因を想像しながら述べた後に、“越高綠色越浅了些”〈緑が高くなるにしたがって薄くなっている〉と結果を続けるのは、恋人の気力もしくは気持がだんだんと弱くなっていることを表しているのであろうか。ところが上に行くにしたがって薄くなっているはずの緑が、山頂で再び出てきて、緑と黄色の縞模様になっている。この二文を「,」で繋げるのではなく「。」で切り離すのではなく「;」で対置しているのは、作者に再会する前と再会した後との対比と見なすこともできよう。縞模様と表現したのは、作者が恋人の前に現れることによって、彼女がいくぶん元気を取り戻しつつも、もはやどうにもならない現実との間でゆれる心情を表しているのかも知れない。期待はあった。しかしその期待は作者の独り善がりの思い込みだったのだろうか、“还是些黄多于绿”〈やはり黄が緑より多い〉とあるのは、そのような思い込みが事実であったと認めていると見ることができよう。恋人と以前の関係を取り戻せると期待しながらも、その反面彼女の素振りから予期し始めたごとく、期待通りにはいかなかったのである。“还是”〈やはり〉がそれを物語っている。

4 山腰中的树，就是不绿的也显出柔嫩来，山后的蓝天也是暖和的，不然，雁们为何唱着向那边排着队去呢？

難解な文である。山の中腹は畑の緑が黄色に変わろうとしている辺りだろうか、その山の中腹にある樹は、緑色をしていないものもはっきりと柔らかさが出ている。消えた生命が人生を全うする年齢には達していない比較的若かったことを暗示しているのであろうか。それとも彼女は微かながらでも自分への思いを抱きながら（“就是～也～”〈たとえ（緑でなく）とも～〉）旅立って行った、と言っているのだろうか。その山の向こうに広がる青空。その空に向かって鳴きながら飛んで行く雁。古来雁は、便り

を運ぶ鳥である。昇天した恋人に自分の思いを届けてくれ！作者はそう叫んでいるのだろうか。山の向こうの空が暖かいのを説明的な言い方である“是～的”でかこんでいるのは、作者の希望的判断によるもの。山の向こうの空は暖かいはずである、と自分に言い聞かせている。そのように思い込もうとしているのである。だから“不然，为何～”＜そうでなければ、なぜ～＞と、後にそれを根拠にした状況判断の疑問文が続くのである。でなければ“山腰中的树，就是～”と“山后的蓝天也是～”が「。」で区切られずに「，」で結ばれている意味を見出すことはできない⁹⁾。そして主語“树”の後にそのまま述語が続く普通の形ではなく、「，」が置かれている意味も、これではつきりするのである。つまり作者は“山腰中的树，～”の状況を眺めながら何かを考えているのであり、考えた結論が“山后的蓝天也是暖和的”であり、その根拠が“不然，为何～”なのである。恋人が旅立った山の向こうの空は、今自分がいることと同じくらい（“也”＜～も＞）暖かくあって欲しい。そんな願いが込められている。

5 石凹藏着些怪害羞的三月兰，叶儿还赶不上花朵大。

恥ずかしそうに咲く蘭の花は恋人であろう。岩間に隠れているのは、彼女の境遇もしくは自分との関係における彼女の立場の反映かも知れない。“三月”は海棠の花が咲く季節。とすればそれは両親とともに暮らしている頃のこと。私娼に身を落とした時の彼女ではない。“叶儿还赶不上花朵大”＜葉はまだ花の大きさに追いつくことができないでいる＞も、副詞“还”＜まだ＞があること、また動詞が“长大”＜大きくなる＞ではなく、“赶不上”＜追いつくことができない＞という表現から、もう大人になっている（“花朵大”＜花は大きい＞）のに、手足（“叶儿”＜葉＞）はまだそれに見合っただけの自由に働かせる条件が備わっていない、と両親と生活している頃の境遇ととった方が自然である。“藏”＜隠れている＞という動詞もその情況にふさわしいし、“害羞”＜恥じらう＞もそうである。

それにしてもこの一文は何のためにあるのだろうか。冒頭の清明節から始まって、恋人の死を暗示する文が次から次へと続いた後で、段落の最後になって出てくるこの文は、今までの流れからしていささか異質な感じがする。場所詞“石凹”〈岩のくぼみ〉は、“山腰”や“山后的蓝天”など、場所を表す語が続いた後に出てくるので、ちょっと気がつかないままに見過ごしてしまうが、対面の山の中腹から雁の飛んで行く山のかなたの空へと視線をはるか遠くに放っておきつつ、いきなり“石凹”という、作者からそんなに離れていないと思われる、地上の小さな特定の場所への視線の移動はいささか唐突である。いや、これは視線の移動ではない。場面の転換である。突然“石凹”のような、今までの流れとは違った方向にある、しかも個別の場所を、何の前触れもなく特定の主語として持ってくるのは、作者の明確な意思があるので、それなりの理由がなくてはならぬ。

死によって永遠の恋人となった彼女。二人だけの時間をもったのは十七歳の時であった。ことばを交わさないことによって、より多くを語った二人。その後小学校の教員になった時、二人は同じ職場にあったが、古い時代にあつては、お互いが意識すればするほど、却って相手を意識的に避けねばならなかった。外国に行ってからでも便りを出すこともかなわず、知人に尋ねることさえも憚れる時代である。帰国後何はさておき、真っ先に恋人の消息を尋ね、私娼に身を落とした彼女に会いに行った。あれこれつづる話をするにはした。しかしこれといった反応を示さない彼女に向かつての、一方通行の話であった。彼にとっての永遠の恋人は十七歳の時の彼女である。雁の飛んで行った山のかなたの空へ昇天したのは、十七歳の時の恋人である。死の直前に会った私娼の彼女ではない。蘭は芳香を放つところから、人格高潔の象徴として、古来より中国人に愛されてきた。私娼に身を落としたとは言え、彼女の心は常に作者の上にあつた。幻想の中で恋人と対話をする作者は、彼女にそう語らせている。冒頭の段落の最後の一行。このとって付けたかのような一行。その蘭の花が光源となって、物語のすみずみまでしっかりと光を当てている。これがこの蘭の一文を段落の

締めくくりとして、視点の移動ではなく、場面の転換として提示した所以であろう。小説冒頭の段落のまとめ、それは小説全体に流れている作者の恋人に対する信頼と思い入れであった。

悲劇に終わった二人の恋。恋人の死後、自分の胸のうちで彼女との真実を求めた作者。幻想の世界から現実に返ったわずか9行ばかりの最終章(第4章¹⁰⁾)は別として、作者の気持ちを整理したこの物語の締めくくりとしての最後の章(第3章)は、恋人の死という冷酷な現実を前に、別れてから再会するまでの心の空白を埋めようとして、17歳の時の面影を胸に抱きつつ、私娼に身を落とした彼女に、どこまでもやさしく語りかけながら、幻想の夢世界に限りなく広がって行く、真実と永遠の愛の物語である。

6 この冒頭の一段は、新しい生命現象とも言うべき春の情景と、それに影を落とす何かとの対比によって構成されている。春は、新しい生命が芽を出す季節であると同時に、古典詩などで普通に見られるように、別れの季節でもあった。新生命の誕生との対比におけるある生命の消滅は、それだけ悲しみやはかなさを深いものとする。中国の詩人は昔より、作詩法において、自己の心情とは正反対の自然現象を対置させることによって、心情の深さを表現する工夫を凝らしてきた。一つだけ例を挙げよう。杜甫の『絶句』である。

江碧鳥愈白 江碧くして鳥愈いよ白く
山青花欲燃 山青くして花燃んと欲す
今春看又過 今春看すみす又過ぐ
何日是帰年 何の日か是帰年ならん

前半二句の自然描写と後半二句の作者の心情とは、言語表現の上からは全く関係がない。しかし前半二句を、後半二句の心情を表現するための背景

ととれば、前半と後半が呼応するように輝き出し、自然の情景のますます美しく活気を帯びてくる季節を背景に、作者の心情はいよいよ沈んでいくのが、鮮明な対比となって我々の眼に迫ってくる。季節は晩春。山の緑は淡い新緑から濃い深緑へと移り、花はいよいよ鮮やかさを咲き誇って、これから一年でいちばん生命力に満ちた夏を迎えようとする頃である。一方春は移動の季節。春の訪れとともに人々は新しい土地へと移って行く。その春が終わろうとしているのに、作者のおかれた境遇では、まだ家郷へ帰る条件が備わっていないのである。今年もまた流浪の旅を余儀なくされ、帰郷をあきらめなければならぬこの寂しさ。詩人の境遇と心境が、生命の活気に満ちた山河の鳥や樹々や花に照射されて、いっそう鮮やかに映し出されている。このような作詩上の手法、形式を何と言うか、筆者は寡聞にして知らないが、もしこのような作詩法があるとすれば、とりあえず筆者はこれを対置法と呼んでおくことにしよう。この対置法は、唐詩では杜甫の晩年の律詩に数例を見るが、その後、宋詞で大きく発展した¹⁾。また赦免の喜びと対比することによって、流罪の悲痛をいっそう深め、悲しみを深めることによって、無罪放免された喜びを一段と高める効果を出している李白の七言絶句『早発白帝城』は、相反する心情の対置による呼応効果が生きている²⁾。老舎は、このような先人の伝統を受け継ぎ、それを散文の中に融け込ませ、消化発展させた現代屈指の作家であると言えよう。文章表記法として、近代以降「;」を用いて文並列を表すのは、対偶表現の伝統を持つ中国語独特の現象であるが、老舎の文並列は、単なる並列や対比ではない。『微神』冒頭の二組の対置文は、現代中国語において、中国語の特質が最も活かされた対置文であると言えよう。小説冒頭の一段落のみを以って稿を起こした所以である。

注)

- 1) 『微神』は『文学』第一巻第四期 1933年 に発表、翌年短編集の『趕集』に収録。小稿は『趕集』版によった。『文学』版と『趕集』版では、標点符

号を含めて字句の異同が27ヶ所ある。単純なミスプリもあるが、同義語の異同が少なくないことを見ると、そこには作者が新に手を入れたことが解る。作者の意図が最もよく出ているのは『趕集』版であると言えよう。「老舎文集」人民文学出版社 1985 年収録の「微神」は、政治的背景により修正せざるを得なかった情況があり、必ずしも作者の意図するところとは言い難い。小稿の対象となっている冒頭の一段には4ヶ所の異同があるが、たとえば作者の重要な心情を表す“转摆”が単なる春の情景描写としての“轻摆”と変わっているところからも解るように、この版を探ることはできない。

- 2) 老舎『微神集』序 1947年, 晨光出版公司
- 3) 伊藤敬一「老舎の微神について」『季刊中国』No4, 1986年春季号, 季刊中国刊行委員会
- 4) 相原茂『微神』はしがき 1986年, 朝日出版社
- 5) 竹中伸訳『微神』『老舎自選短編小説集』1981年, 学研
- 6) 秦耕司「音節構造・形態素・文字」『長崎県立国際経済大学論集』第23巻, 第2号, 1989年
- 7) 昇天することを“归天”と言う。
- 8) 『微神』に出てくる色彩関係の語の一覧表を掲げておく

	第一章	第二前段	第二后段	第三章	第四章	計
颜色	3			4		7
色彩	2					2
彩色	2					2
五彩	1					1
绿	15	3	1	3	4	26
白	9	3		2	2	16
红	6	6		1		13
黑	6	2			2	10
黄绿	9					9
蓝	5					5
紫色	5					5
浅粉	2					2
灰	1				1	2
碧	1					1
暗草	1					1
赤	1					1
银色	1					1
锈色	1					1
粉白		1				1
粉红			1			1

- 9) 初出の『文学』第一巻第四期 1933年に発表されたものには「。」が使用されている。
- 10) この小説は章別には分けていない。内容の区切りを1行開けて示し、全体を4つに分けている。「章」としたのは筆者による便宜的なものである。
- 11) 対置法が宋词においてよく用いられるようになったことに関しては、本学嘱託講師（当時）高兵兵先生のご教示による。ここに記して謝意を表したい。
- 12) 秦耕司「李白『早發白帝城』の作詩背景について」『長崎県立大学論集』第30巻、第2号、1996年